

0歳児クラスにおける子ども—保育者間の視線

Gaze interaction between Children and Nursery teacher in Nursery class

星野 優芽

Hoshino Yume

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 博士後期課程

キーワード：乳児保育，視線，やりとり

Key words : Infant care and education, Gaze, Interaction

1. 研究目的

本研究の目的は、0歳児クラスの子ども（以下、子どもという）と保育者のやりとりにおいて、「視線のやりとり」が、「会話」のような規則性をもつということを実証的に明らかにすることである。そもそも視線は、言語を自在に扱うことのできない乳児において、その意図や関心を表すものとして重要な機能をもつ。しかし、その視線のもつ機能を、保育行為として明示する研究は多くない。そこで本研究においては、そもそも視線が、子ども—保育者間において“どのように”交わされ、またそれが“どのように”機能しているかを実証する。そのために会話分析を思考モデルとして援用し、「視線のやりとり」が「会話」と同じように、ある規則性をもった構造として機能していることを明らかにする。

保育という営みについて、岡（2019）は、「子ども理解」、「ねらい／目標」、「手立て」、「評価（子ども理解）」というサイクルとして捉えている。保育者は、その専門性として、適切な「子ども理解」（子どもの行動、言動、表情などの「事実」に基づいて「気持ち」や「育ち」を「解釈」）をすること、そのうえでその子どもの育ちに即した「ねらい」を立て、さらにその「ねらい」に沿った「手立て」を実践することが求められる。そしてその「手立て」の実践にあらわれた子どもの「事実」から、再び子どもの「気持ち」や「育ち」を「解釈」することで「評価」（次の「子ども理解」）となり、保育のサイクルが循環していく。

本研究では、岡（2019）の示した保育のサイクルにおける「手立て」の部分に注目している。ここでいう「手立て」には、「やりとり等を含めた人的環境としての技能」が専門性として求められる。

すなわち、保育者が子どもの視線などの非言語的な表出を“どのように”扱い、また“どのように”自らも働きかけるか、ということが、「人的環境としての技能」という保育者の専門性に位置づくのである。

ところで、本研究においては、子どもの非言語的な表出のなかでも、視線に着目している。なぜなら、視線はその者の意図や関心の対象を指し示すものとして周知されており、子ども—保育者間のやりとりにおいても、子どもは保育者に視線を向けることで、自らの気持ちや意図を伝えようしたり、対象であるものの意味を保育者に求めたりすると考えられるからである。保育者も、子どもから向けられた視線や、子どもが対象に向ける視線（「事実」）から、その興味や関心、意図を「解釈」していると考えられる。実際に星野（2020）は、「子どもから保育者に向けられた視線（A的）」と、それに基づく「保育者の働きかけ（B型）」を観点としてやりとりを6つに類型化した。そしてそのやりとりにおいて、保育者が子どもから向けられた視線に気付き、また子どもの視線の先にある対象をとらえることで、その子どもの意図や関心の対象を「解釈」していることが示された。

しかし、この類型化では、あくまでも筆者自身による直感に基づく類型化と言わざるをえない。というのも、星野（2020）における類型化では、保育者が子どもから受けた視線（意図）と、保育者の働きかけによる意図の組み合わせのパターンを明らかにしているのみであり、子ども—保育者間の「視線のやりとり」の規則性を見出し、そのパターンを一般化するものではないからである。

そこで本研究においては、「視線のやりとり」を「会話」としてとらえ、会話分析の手法を援用す

ることで、会話分析が目指すような「ある会話がなされる実際の文脈の特徴を考察しながら、同時にその文脈を超えて一般化することが可能になるような説明」(山田, 1999, p.2)を目指す。すなわち、会話分析における「順番取りシステム」や「隣接対」の概念を用いて子どもと保育者の「視線のやりとり」を説明することで、子どもから向けられた「視線」と、それを受けた保育者の働きかけによって構成される「視線のやりとり」が、「会話」のようにある種の規則性をもった構造として捉えられるということ、実証的に明らかにする。

2. 研究実施内容

2.1. 研究方法

対象 保育所 0 歳児クラスの子ども 12 名, 担任保育者 1 名

手続き 石橋ら (2020) を参考に、ウェアラブル型アイトラッカー (Tobii Pro グラス 2) を保育者に着用してもらい、視線の推移を記録しながら、同時にアイトラッカーに映る子どもの非言語的な表出を記録する。加えて、保育者にボイスレコーダーを着用してもらうことで、保育者と周囲の子どもの音声を記録する。また、ビデオカメラによって保育者の表情をとらえる。収集したデータをトランスクリプトに起こす。その際、視線を含む行為や表情等の非言語的な表出は、言語に代わってその思いや意図を表すと考えられるため、通常の会話分析で用いるトランスクリプトに加えて、それらも記載していく。

分析 本研究においては、星野 (2020) の類型化において「自律的自律型 (子どもが自ら保育者に視線を向ける, 保育者は子どもの対象への意図を読みとり, その意図に添うように働きかける)」に分類された事例を分析の対象とした。

倫理的配慮 本研究におけるデータの収集とその取り扱いについては、対象となる保育者と子どもの保護者の了解を得た。その上で、大妻女子大学生命科学研究倫理委員会より承認 (受付番号 2019-018) を受け、研究を実施したものである。なお、本研究において対象となる保育者と子どもの名前については、全て仮名で表記している。

2.2. 結果

本研究においては、星野 (2020) と同様に、会話分析 (好井ら, 1999) におけるシークエンス (会話の流れ) に基づき、事例における意図の流れに

よってやりとりを区切った。

次に示すトランスクリプトは、ホールで子どもたちが自由に遊んでいる場面である。このとき、まず幼児用のコットベッドを見つけたあおいちゃん (トランスクリプト上は AO) が、コットベッドと壁の隙間を進む。そしてそれを見ていたかいちゃん (K) が保育者小田先生 (小田 T) とかかわりながら、その隙間に入っていき、という事例である。

まずこの事例のやりとりの類型化 (星野, 2020) については、0001 において、かいちゃんが自ら小田先生に視線を向けているため、「自律的」な視線となる。また、小田先生はかいちゃんの意図を読みとり、コットベッドと壁の隙間に入るかどうかを尋ねながら (0003, 0006)、実際にその隙間に入るまでを見届けている (0008)。これは、かいちゃんの意図に添って働きかけているため、「自律型」の働きかけとなる。次に、このやりとりにおける「視線」を「会話」として、その文脈をたどると、まずは 0001 においてかいちゃんがあおいちゃんを見た後に小田先生に「視線」を向け、発話相手を選択している (会話分析における 1a 規則: 他者選択)。ここでのかいちゃんは、あおいちゃんがいるコットベッドと壁の隙間の方向に「視線」を向けた後に、小田先生に向けている。したがって、0001 のかいちゃんの「視線」は、あおいちゃんか、空間に対しての関心に基づく、保育者への参照行為と読み取れる。筆者が敢えてかいちゃんの思いを代弁するならば、「ここ、なに?」もしくは「あおいちゃんはなにしているの?」とするだろう。そして、その「視線」によって発話を受けた小田先生も 0003 においてかいちゃんに働きかけている (1a 規則: 他者選択)。こうした発話の連鎖によって、ターン (0001 と 0003) を構成し、会話の「順番取りシステム」が機能しているといえる。しかもこの事例で、小田先生が 0002 においてかい

